OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	頭頸部癌患者に対するルゴール染色を併用した食道内視鏡スクリーニングの有用性
Author(s)	矢野, 外喜治
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38634
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【133】

氏名	矢野 外喜治
博士の専攻分野の名称	博士（医学）
学位記番号	第 11116 号
学位授与年月日	平成6年2月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	頭頸部癌患者に対するルゴール染色を併用した食道内視鏡スクリーニングの有用性
論文審査委員	（主査）教授 森 武貞 （副査）教授 井上 俊彦　教授 久保 武

論文内容の要旨

［目 的］

食道癌はヒト癌のうちで最も予後の不良な癌の一つである。その原因として，進行が速く早期の状態で発見されることが少ないことが上げられる。食道上皮に対する内視鏡下ルゴール染色法は，通常内視鏡では診断不可能な早期癌の診断に有用であり，広く利用される。しかしながら，食道の早期病変を発見することは極めて困難であるのが現状である。今回，食道癌との重複癌として最も頻度の高い頭頸部癌患者を対象にルゴール染色併用の食道内視鏡スクリーニング検査をおこない，食道の異型上皮，食道早期癌の発見を試み，最も早期の状態と考えられている平坦型食道早期癌（0-Ⅱb）の診断・治療につき検討した。

［対象ならびに方法］

1987年6月から1992年8月の間に大阪大学医学部耳鼻咽喉科，放射線科，歯学部口腔外科において治療された頭頸部癌患者304例（平均年齢59.8才，男性233例，女性71例）に対しルゴール染色併用の食道内視鏡スクリーニング検査を行った。

［成 績］

対象304例中，ルゴール染色による検出された不染帯は77例であったが，これらの中に中等度異型上皮16例，高度異型上皮6例，癌19例が含まれていた。一時癌である頭頸部癌の発生部位別に検討すると，下咽頭癌23例中6例（26％）に食道癌を合併していた。また，これらは全て同時性であり，食道には異型上皮・癌などの多発病巣が認められた。ルゴール染色で不染帯として検出された病巣は辺縁明瞭なものと不明瞭なものが認められたが，辺縁明瞭で大きさが1cm以上のものは20病変すべてが癌と診断されていた。発見された食道癌19例のうち15例が早期癌であり，全例が生存中である。

［総 括］

304例の頭頸部癌患者に対してルゴール染色併用の食道内視鏡スクリーニング検査を施行し19例の食道表在癌を発見した。ルゴール染色により辺縁明瞭な1cm以上の不染帯は癌と診断でき，非常に稀な平坦型表在癌の診断基準となっ

た。下咽頭癌には高頻度に食道癌を合併し同時性で食道内に多発病変を有するとから，これらの食道上皮は癌の発生母地としての性格を有していることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は，食道の早期癌を発見することを目的として，頭頸部癌患者304例にルゴール染色を併用した食道内視鏡スクリーニングを行ったものである。77例（25.3%）にルゴール不染帯が検出され，これらのなかに中等度異型上皮が16例，高度異型上皮が6例，癌19例（6.3%）が含まれていた。また19例の癌のうち14例が粘膜筋板（mm）までの表在癌であった。辺縁明瞭なルゴール不染帯で，大きさが10mmを越える病変は，24病変のうち20病変（83%）が癌であった。頭頸部癌のうちでも下咽頭癌は23例中6例（26.0%）に，しかも同時性に食道癌を合併し，これらは全て多発病変であった。治療法には侵襲の少ない局所療法（放射線照射，レーザー照射，内視鏡下粘膜切除，各1例），非開胸食道抜去（11例）が選択され，開胸開腹食道切除が行われたのは5例のみであった。以上の結果から，頭頸部特に下咽頭癌患者には食道癌の発生頻度が高いことが明らかとなり，またルゴール染色を併用した内視鏡スクリーニングにより早期発見が可能であることが示された。本研究は臨床的にきわめて高く評価され，学位に値する。